

3.11 東日本大震災による被災と復興 (社)福島県建築士会 女性委員会

地震・津波による被災は、死者、行方不明者、怪我人、建物倒壊、そして残された人々の心の痛み等、いずれもその傷跡は甚大でした。ですが、日本中の皆様からは、様々なご支援、多くの心の支えをいただき、これからの復興にむけた取り組みの大きな力となっております。ありがとうございます。

【原発事故後】

さて、私たちの暮らす福島県では、東日本大震災は“放射能汚染”と化して、県民の恐怖と不安を増長させ、復興の足枷となっています。これから数十年、臭いもなく目にみえない恐怖の物質と共に生活しなければなりません。福島県の今後のシミュレーションは、原発事故関連の健康被害と、自然環境の変化に伴い破壊される生態系、繋げない企業や家系、人々の不安な心での生活、伝統や文化の崩壊など、多くの被害が予測ではなく現実味を帯びてきます。福島県は県土が東西に広いため、地域で被害に温度差があります。従って復興計画の提案にも差がでますが、原発近辺の住民の避難所生活の大変さを思うと、自らの被害について声を大に訴える事ができません。また、若い世代の夢が奪われたことにより一番大切な“明日”が見えなくなっていました。私達は、原発を容認してきた事への自責の念に深く駆られます。ですから、今できる事をしています。

【まず守るべきものは】

国や自治体の除染作業を耳にしますが、放射能の影響を最も受けやすい子供たちを抱えての除染作業には不安を感じます。除染の間、若い女性や子供達を一時的にでも避難させる事ができたら良いという考え方、家族と共に地域に住み続ける事が良いという考え方、年齢や立場の違いで主張が異なります。一つの答えが出せない困難さがあります。しかし、本当に守るべきものは、子供達です。

【国民の声】

最近では国内で原発についての議論もなされなくなったと感じています。国民全体が、反原発論に対する国の圧力を受けてきた50年余りの歴史の結果が、県全土を巻き込んだこんな大惨事に直面しても、未だ廃炉や脱原発の声が出てこない理由とつくづく思います。

命の大切さや、精神性より、これまで通り経済優先の議論だけが目立ちます。震災前までは私達もそうでした。こんな大きな事態にならなければ気がつかない事に、本当に心から悔いています。

【核の平和利用と原発の安全神話】

核の平和利用が不可能な事は、専門家ほど理解していたと感じます。過去50年余り国策として国内中に原発を建設し続ける一方、老朽化に対する安全管理と核燃料廃棄物処理方法が確立されない事実に蓋をし、国と企業は、有利に原発事業を推進する為の安全神話を確立させてきました。そして私たちは、その安全神話を心の底で疑いつつ見ないふりをしてきました。あまりにも大きな代償を払わなければならなくなりました。

【脱原発にむけた生活】

福島県は、福島第一原発6基、第二原発4基の全10基の廃炉と共に交付金の申請もしない事を決めました。原発依存の生活を反省し、未来の子供達の為に、この危機からの完全復興、何年かかっても県土を3月11日以前よりきれいにする事を誓いました。

今日、地震国日本は、人の手による安全管理が絶対不可能な原発事業の中に身を置き、国土をその原発で自らを包囲してしまいました。しかし、私たちは、今からでも本気で原発の是非について、国を挙げた議論や政策への取り組みを実現させるべきだと思います。新たなエネルギー資源について考え、新たな生活の仕方を模索するべきだと思います。そうする事が、今の日本の正義ではないでしょうか。

福島の再生が無ければ、日本の再生が無いと考えます。

どうぞ原発事故で、見聞きした事を風化させないでください。どうぞ自分の事として考えてください。